

目標めざし、がむしゃらに

石塚弘章さん。毎年5月に成城の小学校から大学までのラグビー部関係者が集まる「ラグビー祭」で先輩たちとふれあうのも楽しみたい



成城大学ラグビー部出身の石塚弘章さん(22、2012年卒業)はこの春、ラグビートップリーグのヤマハ発動機ジュビロにフルバック(FB)として加入した。

チームメートのFBには、ヤマハに属しながらオーストラリアのレッズに所属する五郎丸歩選手がいる。

中学から成城に入った。放課後、校庭で友だちを待っていたときにラグビー部に誘われて入部。それからは完全にラグビー一色の生活になった。休日も練習や試合には制服で行くので、中高時代に私服を着た記憶がほとんどない。

勉強の方は中1の冬に

成績がガクンと下がってしまふ。「これはまずい」と補講に出て頑張った結果、点数がとれるようになった。勉強はラグビーにも生きた。「練習でも指導の意図を理解して取り組むと、より多くを吸収できた」

将来の進路に悩んでいた大学3年夏、7人制ラグビーの日本代表に選ばれた。社会人のトップリーグとの練習ではレベルの違いを痛感した。「もっとレベルが高いラグビーをやりたい」。やる気が火がついた。

秋から参加したヤマハの練習で清宮克幸監督から「うちでやるか」と声をかけられ、進路が決まった。

吉村祥子さん(47、1987年卒)は、89年の女子レスリング世界選手権で日本人として初めて優勝し、引退までに9個のメダルを獲得した。現在、エステティックTBCで働きながら、女子ナショナルチームのコーチを務めている。

成城は中学から。何で

も生徒自身が決める校風が気に入った。修学旅行の行き先も文化祭のテーマもクラスで決める。目標を決めて、さまざまな意見をまとめる経験は指導者になった今、生きているという。

中高は水泳部ががむしゃらに泳いだ。入部当初は100メートルしか泳げなかったが、夏の合宿では毎日1万メートル泳がされた。「先生は笑顔で『できるよ』って」

学校行事で北アルプスの槍ヶ岳(3180メートル)にも登った。臨海学校では2キロの速泳を課された。「準備と安全対策をしっかりした上で、無謀かなと思うことにトライさせ、ゴールさせる。その体験が競技人生に役立った」

高校3年6月、友だちに誘われて日本レスリング協会が主催する女子レスリング教室に通い始めた。相手との駆け引きがものをいい、頭も体も使うところがおもしろかった。すぐに頭角を現し、年内の試合で初優勝。「世界チャンピオン」が新たな目標になった。

「願わなければ前に進まない。とつともない目標でも、やればできると成城が教えてくれた」

(編集委員・吉田由紀)

◇ 次回は15日号、山梨県立甲府第一高校。



吉村祥子さん。指導者として「育っていく選手を見るのは本当に楽しい」と話す